



依師

遠

歌

抄

言

伊地知文庫
文庫20
232



伊傳 建方秘書

伊地知氏書冊



○十林

一 巾之幽玄林

附行雲間雪
有為轉變と云う十林

別路の夜はなほ情みく

行雲 今更し更し心よりまらぬ

月よりなる夜半の山風

間雪

青葉城の花をわらふ山嵐

一 巾二長高林 附高山遠面 沓海西沓海

高山林 住事或馬の如く

石火の其まがし起行未

真禁多記すて山越る人

遠面林 心城すま目城海のりりく

月志起き定まはし

廣沃や詠すて秋のあ

澧面林

すしりおれ松ゆらや

若る行あれまは月城

面澧海林 ころろ詠やう神く

十しりま中花のあけ

春のりりおれ山色あえく

一 中三有心林

會林

附會林別括 括民不明理世 無心あり林十九なる林三季

窓成てて秋月れなる

倅好ま文よき如多故巻捨く

別括林

急しきれふしち起て出如是

松城の志賀れりきき

括民林

秋さあきき木かしのり

松城の遠工中れ草のる

不明林

心よちりりりりりりりり

玄鬼のひしひし折る雨のうら

現世林

世のちかぢ何のうらけ度たらん

哉のよれ花の庭のまじり雪

一才四羅林 附存玉林 花羅林 松林 竹林

秋 深と特て分らんおきおき

可也すれ秋の上 西落

存玉林

多のすきさくおあおあうたうらん

後よ思の老れらうる花うら

花羅林

玉 哉こころもあふまじりのあふ

浅芽生や秋れ又西落月よ思く

松林

浅間のまじりる幸れ木あし

いんこま思る目あはらん富士高

竹林

一才五才了松林 附透冬 抜群 心昂

夢の庵は人ものうらけ

かこきけは出るうらゆる君代

透冬林

遠くもいさうかよや裁すらん

而路りけは秋せまじりの月

抜群林

てた留之所の句の他はくみしてしるす
五ッ目よかき

捨のや 何のや又のやたし

志が真の酒や世にいらす母の清出

かつてしるすのまじりかひし

つとむる月や切字ふてくぬ可論 是六佳吉や

新の石石のあらまじり又後芽生や 山望や

いひて捨のや 但所ははく今にや

裁ふて留にすこし 梅並の別名はのや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

鳥 中のや 何のや又のやたし
鳥のや 何のや又のやたし

上望のや 何のや又のやたし

禁より切字にたりす上より三目八目九目よ

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

あつたの字のつとむるよ 今に梅又顔のや

かくて身んじりしやむの極麻

中や同くするも中やいふにふてをむし

心お遠あらしむ

心より寝の夜は月も常はるはあすどめら

うはく世のつれなはによと留し

是れはやくあしく秋の夜は

心よりの末はしりてやの字は待てしを

是はしや長あはれ無散あはるし所は不定是

印字小くてもねくし押字あつてはよして不留し平

句の中は斗もあつて是れ初よりあまると不好詞を

あつては文のまゝに字

てたふたはた留し角のよふてをば

右のやの字のま中のや口合や捨のや世三の押字

おくておとて留し其外は押字をてはて

は字はけめても留し中のや不切其外のやみか

よて留し字ををのちのねは是其の

心よりの末はしりてやの字は待てしを

是れはやくあしく秋の夜は

心よりの末はしりてやの字は待てしを

是れはやくあしく秋の夜は

深きうらに思ふよふ恨ふ
老しむ身か老しぬ命ふ
又よみの泪をのちる情ふ

一 いのちのまゝいづこに田の夜

いづこ 馬場のつまの山とまうふ

いづこ 山屋のつむの流方

いづこ 春日野の都の西路方

右三同し我うの治定は流るて田し

一 志文字の夜 吾細別傳發切字し

見し消しさ 右三の去て不切の文字がう
くはんく消しささ木こ

遠し 高し 寒し 右三ハ現世切字
又よみの文字に通し 遠き 高き 寒き

夜

夜 暮れ

夜 同

夜 濁

一 右三ハ未来の疑のうら切字 但し
らん田をさく字

いづこいづこ何きさうや

いづこいづこ何きさうや

いづこいづこ何きさうや

いづこいづこ何きさうや

いづこいづこ何きさうや

いふは地むの枝は、
吹くやうききり、是うと待たし
千代さるね、まゝし、
一まぬらんのま

むらむらむらむら
ま保るむらむらむら

一まぬらんのま
まぬらんのま
一まぬらんのま

是はふとてらんとて
あつちまうくまう
是は神樂のこころ

又
白あつちまうくまう
あつちまうくまう
一まぬらんのま

一
是は地む二つ
はののあに後の地む
て下よむらむら
てくむらむら
一
治定のか文
一
是はふとてらんとて

のこころしん八... 地獄ニツキてして面式よふた箇...
一 重又地又とふま

是方成りて今神受ふすま受くま方ふま其
乃本受たりまハ傳之又のまうやむや廿二
より成りたり

又とくま成りて今神受ふすま受くま方ふま其
是方成りて今神受ふすま受くま方ふま其
と冬成りて今神受ふすま受くま方ふま其

一 又とくま成りて今神受ふすま受くま方ふま其
是方成りて今神受ふすま受くま方ふま其
乃本受たりまハ傳之又のまうやむや廿二
より成りたり

と去

いひのりよめよむいひのりよめ
いひのりよめよむいひのりよめ

理を

いひのりよめよむいひのりよめ
いひのりよめよむいひのりよめ

ま来

いひのりよめよむいひのりよめ
いひのりよめよむいひのりよめ

一 ぐいしん... 神木れ千来... 人凡の文に...

しつ葉うも松はあんとつふ方い書来りて
かまのひは是のいふと心くして書来りて
かきてはてよかしく不田とて和方のよ
秘は又すまをまきまのいふ書来りて傳之

一 一字ふのよま

夕哉ぢけ哉くふよ又きん

あまのさくさくつてくめらるる

一 二字ともん

人のまのあや、つる世の中

二月也いおもひんまをいひ観の春

あまのさくさくつてくめらるる

一 三字ともん

今この秋いふ山あつこ

原いづくに秋の野の末

あまのさくさくつてくめらるる

老はのまはんしん

そのまはのまはんしん

右の同じ老曾のまはんしん

一 四字不同

あまのさくさくつてくめらるる

あまのさくさくつてくめらるる

是あまのさくさくつてくめらるる

一 四字同字

秋のまはのまはんしん

あまのさくさくつてくめらるる

あまのさくさくつてくめらるる

あまのさくさくつてくめらるる

あまのさくさくつてくめらるる

あまのさくさくつてくめらるる

一

此のし又云^そ中^そも^そら^そし^そる^そ文字^そ前^そ文字^そに^そて^そは
 不^そ留^そ又^そ一^そ傳^そた^その^そま^そく^そ字^そに^そ五^そ音^そ指^そ通^そと^そ文字^そ
 相^そ通^そと^そ又^そ云^そ此^そ題^そに^そぬ^その^そ字^そ入^そと^そ不^そ入^そあり^そぬ^そを^そ今^そ
 八^そ字^そ二^そ組^そ是^そ指^そ通^その^そく^そす^そぬ^そふ^そじ^そゆ^そ留^その^そ
 字^そと^そ十^そ字^その^そま^そじ^そぬ^その^そま^そじ^そゆ^そ留^その^そ
 八^そ字^そ留^そり^そた^そら^そぬ^その^そま^そじ^そゆ^そ留^その^そ
 よ^そま^そし^そ十^そ字^その^そ相^そ通^その^そ一^そ組^そ字^そ加^そて^そ八^そ字^そに^そ
 一^そ字^そ留^その^そま^そじ^そゆ^そ留^その^そ

身^そは^そ心^そ上^それ^その^そつ^そ留^その^そ高^そ勝^そも^そす^そ又^そ下^その^そ句^そ

君^そ我^そ後^そ夜^そい^そか^そつ^そか^そら^そ

如^そ若^そ一^そ句^その^そ義^そ理^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ
 今^そ百^そ韻^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ
 今^そ百^そ韻^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ

耳^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ

此^そ句^そ初^そい^そ不^そ留^そ

一

一^そ字^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ
 エ^そケ^そセ^そテ^そニ^そシ^そヘ^そメ^そス^そシ^そエ^そ 五^そ音^そお^そ留^そ
 耳^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ
 耳^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ
 耳^その^そま^そじ^そた^そゆ^そ句^その^そ留^そは^そ是^その^そ系^そ

かとう不教と未来のー小いつまきしぬ亦云々の字
をさう一字かくし只一字の記切と定れあり秘文く
心とひのしりふ斗をあつふ時とつと流の
留めも中ふまきおめか中よめはー是は切
これと知さぬははらう
右の字とるの字上の句は時をさく字ありて、
或てふと留りて

一 下の句で留の度 継念ハ

兼く文字ふくまふ月へのりて
あれと股西へあつめ時下の句でと留り
下の句で留の度 継念ハ
兼く文字二つ定て留し亦云兼句月見へて

花見してある時下の句ふと留りて下の
句もかりり多る留りて好と云々

一 上の句で留の度

師の三人の師傳と傳受せし小母留の早く有之
えつ小いふて留りてわんしとくもつら
この句を入る留りて下但世祖不全一句の首
尾のまきとるしとすは留りてあしとすは
おの上の句のまきとるしとすは留りてあしとすは
流りの字のゆるりてはとすはとすは
と流りてとすはとすはとすはとすは

是の字は流りのとすはとすはとすは
三つおの字のまきとるしとすはとすは
是の字のまきとるしとすはとすはとすは
とすはとすはとすはとすはとすは
海土ふまきとるしとすはとすは

是しつらぬらう也しきりつら皆押家らてに因

ひくはぬぬらう前かかひの字かゝらうていつく
やに吟しきりてすらうまききききき

命のくもるまに高橋のまへ
かひの木の梢へへ懐りー 半珠

是は曉よりのまきききかかかひのまききき
おののまにのまのまきききかかかかかか

まきききまきききまきききまきききまききき
まきききまきききまきききまきききまききき

まきききまきききまきききまきききまききき
まきききまきききまきききまきききまききき

まきききまきききまきききまきききまききき
まきききまきききまきききまきききまききき

八月の後ハカハカカカカカ

とありありと遠山に八月つててい但世所膏吹
ゆらゆらと白地も威かろくしきききききき

云に白の一句よる去のしむききかかかか
現をさしめて不白亦ふの始あるは不昔年眼

ハ不白亦云不白は白也
越寸板のかうくもては伝早に

かきききかきききかきききかきききかききき
かきききかきききかきききかきききかききき

かきききかきききかきききかきききかききき
かきききかきききかきききかきききかききき

かきききかきききかきききかきききかききき
かきききかきききかきききかきききかききき

かきききかきききかきききかきききかききき
かきききかきききかきききかきききかききき

かきききかきききかきききかきききかききき
かきききかきききかきききかきききかききき

かきききかきききかきききかきききかききき
かきききかきききかきききかきききかききき

目録の如く拾い

一 如文字の長 雪より道ありれ冬の上

雪詰り道ありれ春の上

冬の上の白くふの如くありれ春の上の山ありれ

一 舞の切字の長

哉 毛ふり ちりばり せん せん せん
そりや ちりばり せん せん せん
いりりりりりりりりりりりりりりりりり

系下知の詞よせてけまぬぬぬぬぬ

一 之能切の各切たふ神ある也之能は宝文
いのちも各ある也の如く之名たり

花の如く柳の如くを裁つて

名あるもの之を宝文の上ニツカ名ある也を宝文下の
名ある也いして裁つもの之を宝文切るといふは
是れ秘傳といふは傳へりし切字といふは
一ツより二ツの神と宝文をよするも平包の
宝文と神ある也之を宝文として下はと裁めを
宝文の切つて之能の神ある也末のうと裁也
ふつと之を多うして舞のうたの如く花とく細柳と
ハ舞をいして心といふは舞の如くけい舞の如く
風谷のあ音たり

文ははらりりりりりりりりりりりりりりりり

是は各人の舞のふく之名をいれとれと韻
字といふ也たりぬは切つて舞あり大上
みりりりりりりりりりりりりりりりりり

一 二丁の風ありの... 幾地おて切る...
一 大自... 春の... 玉津浦

上の... 命... 流...
雲... 上の... 下の... 似合

一 一と文字切... 宗紙
...
...
...

中世... の末...

松風... 宗紙

... 文...
お... 春...
...

...
...
...

...
...
...

竹神ハ凡作のあやうき美有也
一 竹神ハ凡作のあやうき美有也

富事富事 一 富事

一 現世のしりあて留りたるはてしなく
一 現世のしりあて留りたるはてしなく

一 右のあやうき美有也

一 深ふりまの舞吹来ぬ風かな
一 深ふりまの舞吹来ぬ風かな

一 詞は物と兼ふのとき

一 昔の心は春向の音はゆく用もあるものなり
一 昔の心は春向の音はゆく用もあるものなり

一 上風の吹来たるは春の

春の吹来たるは春の
一 春の吹来たるは春の

一 散りたる葉は地の間に
一 散りたる葉は地の間に

一 一文字のついでには
一 一文字のついでには

一 遠 近 白 音 音 赤 星

うしめし 言し 浅し 深し 寒し

暑し 茂し 火し 難し 正しく

よし たりし 是皆き 正しく 此れ

又理也 文字の下の 切字

寸涼 亦し 等し 或者

ひき 涼し 此れ

命也 此れ

此れ 涼し 切字 寸涼 亦し

涼し 切し 此れ 切し 切し

秘也 此れ 涼し 切し

おし 切し 切し 切し

涼し 切し 切し 切し

つし 切し 切し 切し

欲の字 又す 娘 亦し 切し

等し 切し 切し 切し

是み 切し 切し 切し

一 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

切し 切し 切し 切し

ちりちり幾村秋の露を八層のうらみの下敷詞と
聲するらむにたつらう茶祖にかけあつたや
ちりちりうらみの下敷詞にかけあつたや
師の云ふ可ふは傳句のほららむと都し海
和方の傳句は道成詞のよきや
秘変はするらむとまのたのむにまの平歌

一 まのたのむ

上陰の月も秋のからむ

そがかげしよの字からんは月影の
の屋まじくは流るる月影のよきや

赤尾句の病は
月よしの病は
月影の病は

白くもたしむるは月影の
白くもたしむるは月影の
白くもたしむるは月影の

赤尾句の病は

一 注尺すらすは
海をよみ

いしよの
世はさく尺寸のふくあしきつあつたな
いはちか尺寸のゆりし友らるるむじ
寸はさく尺寸のふくあしきつあつたな
分あつた

一
たの梅のついで
之大祈の侍よ 世よふか白あつては梅の夏も
少く大もこさすの世を梅のむもやあつた
たの梅のついで 世よふか白あつては梅の夏も
作の及ふよあつた 香師よあつたつくとつと
次よて中あつた 第一話の神侍よたあつた衣
たの春たのこさすの世を梅のむもやあつた
あつたつとあつた梅のついで示るるあつた
世よふか白あつたつとあつたつとあつた

世はさく尺寸のふくあしきつあつたな
いはちか尺寸のゆりし友らるるむじ
寸はさく尺寸のふくあしきつあつたな
分あつた
世はさく尺寸のふくあしきつあつたな
いはちか尺寸のゆりし友らるるむじ
寸はさく尺寸のふくあしきつあつたな
分あつた

野山あつた梅のついであつたあつた
ねーあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

そいふ句は梅も梅もまきする。何句ハ美木の梅と
ふりすも成海を炎た

・**なほ**の祈

めでしむる歌よむの香のりたる

とくしあふ

梅よのあふまもつと梅咲く

そいふ句の梅はあつらひの梅もむすし梅のむ
しとけりそ名あふ

・**あ**の祈

花よりむの色やそあふ

いしあふ

梅よ美木よりしとまき

そいふ句の梅もあつらひの梅もむすし梅のむ
むの色を流しとまき

たに神古よりしとあふす院梅のあふ

柳句成作て中へ

一 吾君の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

そいふ句の馬は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

一 禊の禊は名馬有るを歌ふ名馬とけりて

一 朔

既立待の月... 朔の月... 上陰... 下陰... 朔の月と有明... 朔の上陰... 朔の下陰... 朔の上陰... 朔の下陰... 朔の上陰... 朔の下陰...

一 村

既立待の月... 村の月... 朔の月... 朔の上陰... 朔の下陰... 朔の上陰... 朔の下陰... 朔の上陰... 朔の下陰...

しつこく六月七日申道は分るく七月
すくく八月廿五日申道は分るく九月
頃雨く十月廿五日申道は分るく十一月
く霜秋果は冬十月廿五日申道は分る
之霜く秋果は冬十月廿五日申道は分る
あつて降より秋果は冬十月廿五日申道は分る
村西より七月廿五日申道は分るく八月
春の村西より七月廿五日申道は分るく八月

母ら西の村の下のりも
澤山この村の裏のりも
そ橋井平仙村のりも
波御村のりも
子御のりも

一 四道の奥儀の傳

しつこく六月七日申道は分るく七月
すくく八月廿五日申道は分るく九月
頃雨く十月廿五日申道は分るく十一月
く霜秋果は冬十月廿五日申道は分る
之霜く秋果は冬十月廿五日申道は分る
あつて降より秋果は冬十月廿五日申道は分る
村西より七月廿五日申道は分るく八月
春の村西より七月廿五日申道は分るく八月

そよよの海句一三句よりいふに
耳より多かり地ふしてさう
よきおよひいひしりし
昔世は白梅はあはれ
淡木はふらふら
末しわが海にまき
あまのうらみ
よおぬえきまの
はそひひひひひひ
はるのさか
あまのうらみ
ふも葉上柳又
水田の港汀は水海潮

はるの哉有る哉わが春の霞春の
越後春よと困ちる
赤心は海は句ある
花よ春の哉付各鳥よ
日星と月と海と
あまのうらみ
むし
里あまの心
春の霞
春の霞
人待宿よ哉
春の霞

海まの長らふこと上り
と伴らねばは夜か
木のたれ取れ
土はらし神のこちのま
一 寺うてを
舟も波を
雪積り
こころ
冬
春
秋
旅
帰

やうも葉れ世明の
新葉捨る心世よち
齡
及ば思ふ
い松山の冬
春
根は
あ
田舎
アサ
川

出つたがのなまのまはなつた
 かあつたつたつたつたつたつた
 立はせあつたつたつたつたつた
 雨ふく春は春のつたつたつたつた
 事やつたつたつたつたつたつた
 初名は火汁のつたつたつたつた
 雨ふくつたつたつたつたつたつた
 野は春のつたつたつたつたつた
 地のつたつたつたつたつたつた
 老のつたつたつたつたつたつた
 あつたつたつたつたつたつた
 りつたつたつたつたつたつた

一
 あつたつたつたつたつたつた
 初名は火汁のつたつたつたつた
 雨ふくつたつたつたつたつたつた
 野は春のつたつたつたつたつた
 地のつたつたつたつたつたつた
 老のつたつたつたつたつたつた
 あつたつたつたつたつたつた
 りつたつたつたつたつたつた
 出つたがのなまのまはなつた
 かあつたつたつたつたつたつた
 立はせあつたつたつたつたつた
 雨ふく春は春のつたつたつたつた
 事やつたつたつたつたつたつた
 初名は火汁のつたつたつたつた
 雨ふくつたつたつたつたつたつた
 野は春のつたつたつたつたつた
 地のつたつたつたつたつたつた
 老のつたつたつたつたつたつた
 あつたつたつたつたつたつた
 りつたつたつたつたつたつた

一 常秋の句

秋の海の釣み遠き江
 ありの遠きあしつら
 日のおと見ぬまはあま物
 ありあまのあまあま
 岸より葉おとす秋の世
 自らの持掃の雪の朝
 ありあまのあまあま
 遠山の雪の夕は釣
 ありあまのあまあま
 心の世の持掃のあま
 一 常秋の句

一 云々句

深く川流し衣の音
 秋の葉の可き月を
 霧の河原の春の
 楊子山を遠く夜の
 春の夜月を
 日中紅の
 秋深き原野の末の
 本末を色つる遠近
 山
 藍山の
 天津橋沖津子の
 一 云々句

一 二五三四の句は下の句もせよ
 薄幸はのれ舟の胡蝶を
 秋のあはれ城のよ
 浦の難波の春れ朝明の
 泉郎はるるるるるるる
 きては一夜の今一年も
 絶ゆる思のつらかりし中
 ぬれず世に人よら
 ことなれば世にたれば
 志よふししてあはれまは
 おぼえあはれあはれ

一 二五三四の句は下の句もせよ
 戻馬のくつろぎは
 いはれらるる人あはれ

一 二五三四

一 感 真 曲 過 現
 未の心とてなれば言ふ

右回お曲の心とてなれば言ふ
 二句も右回お現とてなれば言ふ
 句とてなれば言ふ

云々一何句し言ふる如くは
右何す哉いかにしやあはれ
毎の其心つじ肝要に
あ、いかにしやあはれ
口らと我れを氣にせし
思ぬをの白しむよみ哉々

真 鳥のまの目しよみ哉々
曲 月こまひ上る葉玉の
百年の我が夜の何南々
おやどし女と春の細み
ふれはまの草の野原よ
むよふ法をいふるま
世よふれお氣あはれし

未 清むよふとあはれ
これあつと我れ待り久
ん世とて多の女に
初来はまの心けいおらん

ふれはまの心けいおらん
ふれはまの心けいおらん
ふれはまの心けいおらん
ふれはまの心けいおらん
ふれはまの心けいおらん

○ 月捨り詞

- 一 一、ら春の季のまの心けいおらん
- 一 一、えの心けいおらん
- 一 一、ふれはまの心けいおらん

一 宿田のあ
 一 埜のこゝろの境木境早し下苔
 一 浦里海里遠里野里遠道遠田つう田
 一 等あしうい
 一 野のやうをわうのれあ
 一 のしあうをわうのれあ
 一 花土段のうらさうよる人
 一 池邊あし
 一 舟かけ通じ舟輕舟ちうも舟下宣捨舟
 一 ちし舟ていぬ
 一 江の村孤の村孤の五峯あし心教のうよれあ
 一 下宣けふい
 一 鶏いくなまのうをわうのれあ
 一 うう音十只馬の音ぬ

一 うう鳥市鴉あし
 一 牧せし野あし
 一 鴨馬のあし鴨のあし鴨のあし鴨のあし
 一 鴨のあし鴨のあし鴨のあし鴨のあし
 一 校楊のあし校楊のあし校楊のあし校楊のあし
 一 葦の葉のあし葦の葉のあし葦の葉のあし葦の葉のあし
 一 神の床のあし神の床のあし神の床のあし神の床のあし
 一 捨人のあし捨人のあし捨人のあし捨人のあし
 一 下衣のあし下衣のあし下衣のあし下衣のあし
 一 思いであし思いであし思いであし思いであし
 一 下すあし下すあし下すあし下すあし

字の合してて薄煙のふしやうとて人の佳める
不可有子細

我が旅の古の友は毎夜思ふはる里の合
いとて無しは多しけりあはれ我がこと急の福よ
あまの友はたむけしき

よの句れ果て来てはまゝ来てよけあ

学問の道君のつれなき位とての良人なりて
我すらくはしむる友はあふりてか

舟のつれなき友は世に思ふは多しけり
老りて不費とて老る友はあふりてか

旅のつれなき友はあふりてか

非用捨之詞或人依和宗長法師
注之を可深信者也

詞方別之友

春夕交田の文字かてて思ふ

秋の夜白萩の白つし白萩等あはれ

八重の葉冬冬雨庭の雨あはれ

曉夜歸るあはれ

詠了一月月夜はあはれ

昔も立蓮花を涼らあはれ

五月や冬冬三文字つてあはれ

久山あはれ

鳥あはれ

片面片あはれ

瀧音谷里 深里浦松あはれ

股の裏より... 思ひの... 定家... けり

明應三年壬子仲秋日依或為年任之
天正十三年九月十日詔也、

運分寸且可、日傳

一、地運文の心得

明保の... 海... 波... 小波

龍衣音介行、略して

山、末のつ、其小田

龍衣の音を介し、山、末のつ、其小田

一、の恒根を、其小田

あり、其小田

古来の恒根、流を、其小田

心、其小田

明保の、其小田

明保の音、村、其小田

野、其小田

示れし遊々かみん哉かき云う哉
心も居つてつらんもさう
あつた捨つた元がしつた

あつたしつた毎葉の恨ふか
前より後方の長そと
ぬかひしつたしつた

多利のしつたしつた
たのじやうしつたしつた
あつたしつたしつた

草木とまふしつた
野方せし夜の月影よりあつた

野方せし夜の月影よりあつた
野方せし夜の月影よりあつた
野方せし夜の月影よりあつた

一才之系氣まふれぬ

つらつらつた野一の古道

一村の竹の葉を梅笑ふ

野村の神の竹の葉を梅笑ふ
の梅笑ふしつたしつた

あつたしつたしつた

あつたしつたしつた

あつたしつたしつた

あつたしつたしつた

村竹の陰に竹の影をさすすす
不乃凡言さす

雨の降るは雨の降るは雨の降る

あまの山に雨の降るは雨の降る

雨の降るは雨の降るは雨の降る

あまの山に雨の降るは雨の降る

一 中 白 石 成 立 部 有

白の石成立部有

山吹の垣にあまの春の

あまの山に雨の降るは雨の降る

あまの山に雨の降るは雨の降る

あまの山に雨の降るは雨の降る

らひたりし和を永世にすむ

まの末の本のついでに月

前日泉殿のまの油涼たはれ和泉の

国は石折のしやうのれはたたり、障子の

赤、和泉の国に水は月々林なり

おのちまのし、麻のたはれ

工殿の迹の古畑あはれ見

何歳か古畑にたたり麻のてはふらふたたり

髪はし、毛のたたりおのち

衣のまのし、障子のた

高所のまのし、油のたたり

高所、油のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

油のまのし、障子のたたり

都は、障子のたたり

都、障子のたたり

都、障子のたたり

都、障子のたたり

都、障子のたたり

一 中五撰

高所、油のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

高所のまのし、障子のたたり

宗祇 宗長 宗砦 在判

法眼經

法橋昌比

宗祇回国後行の... 宗長へ旅宿此
夜... 相傳... 是哉

竹所の詞

一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...

火... 山... 草木... 年... 名... 川... 音...

消... 霜... 雪... 灯... 余... 罪... 科...

月... 日... 霜... 風... 水...

車... 暇... 雨... 月... 日...

霜... 露... 月... 袖... 香... 恨... 恨...

鳥... 春... 秋... 月... 日... 名... 處... 烟...

鐘... 敗... 鳥... 床...

花... 月... 雪... 夢... 水... 道... 山... 歌...

上... 衣... 袴... 子... 日... 敷...

風... 橋... 一... 鳥... 床...

雨

松を川音 潤木の葉 草の香

雪

月夜 白髮 浪

雪

雪 雨 七世

雪

竹 系

雪

舟 蛙

雪

舟 蛙 七世

雪

水 月 七世

雪

月 七 露 河 雨 木 木 葉

雪

床 子 鐘 風 水

雪

雨 風 鐘 礎 水

雪

月 雪 七 春 秋 七 七 七 七

雪

秋 七 七 七 七

火

螢 七 保 舟

煙

竹 松

松

松 竹 煙

松

霜 七 七 七 七 七

松

風 鷺 鴨 地 七 露

松

秋 七 七 七

松

七 七 七 七 七 七 七 七

松

松 七 七 七 七

松

洞 露 七 七

松

七 七 七 七 七 七 七 七

松

七 七 七 七 七 七

松

七 七 七 七 七 七

ふりやうの 山あり雪やし雲 石路心
あまの 山井川き雲谷
あまの 野上月日舟
あまの 月を山やし雲
あまの 月を山心せ
あまの 秋(金) 秋の野も 月也
あまの 磯衣浪
あまの 虫の 夕鐘 虫の音
あまの 月日 鐘灯道 山あり
あまの 月を松竹 早霜雪
あまの 心 葉揚各 油月
あまの 君代 法 野方 夕

かき 波を水一し
あまの 妙一 殿前 鳥一 夕友
あまの 春 柳 鳥 馬
あまの 床 野分 左の 霜雪 鳥
あまの 月日 斬 行 夕心
あまの 床 野山 学し 雪霜
あまの 松木 舟 夕 夕 夕 夕 夕 夕
あまの 玉の 地 余 夕 夕
あまの 舟 弱 心
あまの 舟 弱 心
あまの 露 扇 霜 心
あまの 瓜木 夕 柳 夕 夕 夕 夕

遠き 鐘野山旅首道
 近き 春城山と風利
 つらき 馬気持
 ながき 日夜舟の縄
 こころ 下し心 承
 しんがし 柳露雪心洞裏髪
 絶てし 玉の結道揚夢傳る也
 ちかき 春秋年野上道月
 かしら 瓜木 七
 かしら 松の葉

ともし 大く 釣舟法忘
 吹く 笛も鳩
 つらき 蛩洞おやし
 ちかき 世は国少調和
 ひくく 鐘あり
 ちかき 春秋野山余鐘
 ちかき 春秋雁舟くつり
 ちかき 野山み草虫の音
 ちかき 柳葉くさ虫の音きん
 ちかき 三舟日新地日新
 右扁他准之

○春日の巻物

ついでにさういふものがある
天比の燃ゆる春の夜は
春のこゝろはさかんに
木陰のさかむらさき
春のさかむらさき
まの下のまの下の
埋火の燃ゆる春の夜
春のこゝろはさかんに
まの下のまの下の

胡日いさうの春の
陰のさかむらさき
梅のさかむらさき
鳥のさかむらさき
良地のさかむらさき
陰のさかむらさき
のさかむらさき

思ふはあはれし
一村の林のまはりに
梅は比喩に
うらやまふ
たのほち
たもと
限
高

春の野
あこび
留
散
深
世
あ

長
神
聲
鐘

子規すのけ 枕をさしとて
那子ぬきあつたけは後行ん
村やこゝ声あはれり茶臼
下也之昔の一村おるに茶
置たぬよ夜半の凍し
あぢき川海道の絶
しそぬかりしもの後行ぬ
ふり葉は松もさう 一村
9ころ夜をよめるし 別し捨る

秋まじり

いづれもあはれしことりり

夕露のあはれしことりり
さしなうけし秋まじり
露白のむすむすの野に
露あはれしことりり
朝露のあはれしことりり
露あはれしことりり
とて月つらきことりり
男麻のあはれしことりり
つらき秋のあはれしことりり
あはれしことりり
虫のあはれしことりり

この山はたけなほり
こゝろの山はたけなほり
山はたけなほり
うの心の山はたけなほり
早木はたけなほり
野はたけなほり
あまの山はたけなほり
都はたけなほり
一目はたけなほり
あまの山はたけなほり
都はたけなほり
あまの山はたけなほり
都はたけなほり
あまの山はたけなほり
都はたけなほり
あまの山はたけなほり
都はたけなほり

かゝ衣打すまじ宿に月更々
ひりくよま野の路を
翅香に初霜の秋更々

冬更々

霜の山はたけなほり
村千鳥の山はたけなほり
秋の山はたけなほり
霜の山はたけなほり
村千鳥の山はたけなほり
秋の山はたけなほり
霜の山はたけなほり
村千鳥の山はたけなほり
秋の山はたけなほり

落葉はたつとちよみ淡雪

。雑述

言をきりし條ある人の声
胃床くくく在明の法路鴻
若くし友よこよやあは
夕のす波ふつまは
宮本はらく九重のうら
まの野や紫の重初めつ
うらむるはたはたの父重

浦邊くもくもくはたはた
心なきはたはたはた
まのめはたのぼくはたはた
かたはたはたはたはた
よの海江よ松の葉はたはた
草のうらむはたはたはた
夜の雨はたはたはたはた
草原よ海ま釣せし舟朽
信の舟は浪よ清はたはた
塩の漬はたはたはたはた
あはたはたはたはたはた

母の家のあつて君の代り
いふおぼろし功をまかす男
飛ぶと思ふはまは法場の
十音寺の山寺の
はし来りて道の邊のかはら

從
清
山
南
山
子
場

周
蘇
子
の

